

Series

もうひとつの まち
都市 の中へ 3

松本コウシ

Visions of a still night

「続・眠らない風景」より



Profile

松本コウシ Koshi Matsumoto

1961年広島生まれ。

大阪芸術大学写真学科卒業後、大阪宣伝研究所を経てフリーランス。

夜の街を彷徨して撮影した写真集「眠らない風景」他、「京阪沿線」

「ウイークエンド」、「記憶への旅」、「肖像権」などの著作がある。

日本写真家協会・日本写真協会会員。

青の竜舌蘭を捜せ

アオリュウゼツラン、聞き慣れない名前かもしれませんが。というも、おそらくはほとんどの方が、この植物のことを巨大化したアロエだと誤解しているようです。

American Aloeとも言うそうですが実はアロエ科ではなく、通常Century Plant(百年植物)と言われるリュウゼツラン科に属するこの植物は、百年にたった一度だけ(実際は30~40年周期で)茎を5メートル以上も伸ばして花を咲かせ、その労力のため自らが枯れてしまう、なんと刹那的な植物なのです。同じ種の中で、テキーラの原料になるものもあるそうです。

このメキシコ生まれのアオリュウゼツラン、団地や工場の片隅などで、よく見かけていましたが、最近非常に少なくなっているようです。

理由は、棘が非常に鋭くケガの原因になるために伐採されたり、あるいは昭和30~40年代に植えられた多くのアオリュウゼツランが、西暦2000年を境に開花し、枯れてしまったから、などが考えられます。

また、関西の住宅圏における植栽文化の変貌に目を向けてみると、どうやら時代時代、あるいは地域地域によって、植栽の流行というものがあつたようです。特に関西では、団地が出現した昭和30年代頃より、カナリヤヤシ、棕櫚(シュロ)、ユッカ、そしてリュウゼツランなどが、団地の中庭や個人邸宅で、好まれて植栽されてきた経緯が見られます。

では、当時の流行は、なぜこのような南国風だったのでしょか?理由のひとつに、「宮崎新婚旅行説」というのがあるようです。昭和30年代~40年代の新婚旅行の定番でもあつた宮崎の象徴「フェニックス」、つまりカナリヤヤシを団地内に植えることで、新婚生活のスタート地点である生活空間に、楽しかった思い出を描いたということなのでしょう。

もうひとつは、「出身地思い出説」。当時大阪は、主に九州、四国、沖縄などからの就職者が多く、見知らぬ地に来て、安心して暮らせるような配慮だったのかもしれませんが。

今でも、大きな工場の入り口や中庭には必ずといっていいほど、フェニックスが植えられていて郷愁を誘います。

また、個人宅や工場の玄関に植えられるリュウゼツランは、ある意味権威や強さの象徴だったのかもしれませんが。これも大阪的発想のひとつだったのでしょうか。

現在、これら南国をイメージさせる植栽は、古い団地や工場でしか、あまり見かけることがありません。危険なリュウゼツランは、最近の流行であるヨーロッパ調のかわいらしいコニファーなどに変わり、街中での勇ましい姿を見ることも非常に少なくなってきました。